第６講 演習問題

第３問

次の詩「永訣（えいけつ）の朝」（宮沢賢治『春と修羅』、一九二四年）とエッセイ「宮沢賢治の挽歌（ばんか）」の一部（山折哲雄『悲しみの精神史』、二〇〇二年）を読んで、後の問い（問１～５）に答えよ。なお、設問の都合でエッセイの本文の段落に 1 ～ 8 の番号を付し、表記を一部改めている。

永訣の朝

けふのうちに
とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ
（あめゆじゆとてちてけんじや）A
うすあかくいつそう陰惨（いんざん）な雲から
みぞれはびちよびちよふつてくる
（あめゆじゆとてちてけんじや）
青い蓴菜（(注１)じゆんさい）のもやうのついた
これらふたつのかけた陶椀（たうわん）に
おまへがたべるあめゆきをとらうとして
わたくしはまがつたてつぽうだまのやうに
このくらいみぞれのなかに飛びだした
（あめゆじゆとてちてけんじや）
蒼鉛（さうえん）いろの暗い雲から
みぞれはびちよびちよ沈んでくる
ああとし子
死ぬといふいまごろになつて
わたくしをいつしやうあかるくするために
こんなさつぱりした雪のひとわんを
おまへはわたくしにたのんだのだ
ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
わたくしもまつすぐにすすんでいくから

メモ欄

　（あめゆじゆとてちてけんじや）
はげしいはげしい熱やあへぎのあひだから
おまへはわたくしにたのんだのだ
　銀河や太陽　気圏などとよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……
…ふたきれのみかげせきざいに
みぞれはさびしくたまつてゐる
わたくしはそのうへにあぶなくたち
雪と水とのまつしろな二相系（にさうけい）（注2）をたもち
すきとほるつめたい雫（しづく）にみちた
このつややかな松のえだから
わたくしのやさしいいもうとの
さいごのたべものをもらつていかう
わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも
もうけふおまへはわかれてしまふ
（Ora Orade Shitori egumo）（注3）
ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ
あああのとざされた病室の
くらいびやうぶやかやのなかに
やさしくあをじろく燃えてゐる
わたくしのけなげないもうとよ
この雪はどこをえらばうにも
あんまりどこもまつしろなのだ
あんなおそろしいみだれたそらから
このうつくしい雪がきたのだ

　（うまれでくるたて
　　こんどはこたにわりやのごとばかりで
　　くるしまなあよにうまれてくる）
おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまこころからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになつて
おまへとみんなとに聖（きよ）い資糧をもたらすやうに
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

メモ欄

（注）
1　蓴菜――スイレン科の多年生水草。若い芽や葉は食用。
2　二相系――ここでは、みぞれが氷と水の二相をなしているという意味。
3　Ora Orade Shitori egumo――「私は私で一人行きます」という意味。

宮沢賢治の挽歌

[1] 賢治の言葉が標準語で書かれているのに対して、とし子の声が岩手方言で記されていることに注意してほしい。死にゆく者に対する賢治の呼びかけの声が標準語に移されているのに、死にゆく者の言葉は岩手方言のまま風にのってきこえてくる。そういう構成になっている。死者と生者の対話が方言と標準語に書きわけられている。

[2] B<u>賢治はどうして、自分の呼びかけも方言にしなかったのだろうか。</u>かれら兄妹は日常的にはいつも岩手弁で語り合っていたはずなのに……。単純に賢治が**詩人**であり、とし子が岩手の人だったからなのか。しかし賢治の詩には、岩手方言だけで書かれたものがないわけではないのである。「けふのうちに　とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ」を、賢治はどうして岩手弁で書かなかったのか。「あめゆじゆとてちてけんじや」のような、土地の霊がこびりついているような言葉に移さなかったのだろうか。

[3] これまで「永訣の朝」は賢治の挽歌とされてきた。むろん、それに誤りはない。そのためであろう。賢治の言葉をのせる標準語の部分が、この詩の骨格とされてきた。朗読するときも、その部分が大きく強くクローズアップされて読まれてきた。それにくらべるとき、とし子の岩手方言は、カッコにくるという作者の演出も手伝って、ど

メモ欄

ちらかというと(ア)くぐもったような口調で（気持ちで）読まれてきた。暗い背景から明るい詩語の表面にとどけられるような言葉として、それは発語されてきた。標準語が主旋律、方言がその伴奏、といった感覚だったのではないだろうか。標準語が前景に(イ)せり出し、方言が後景に退いている。そういう解釈、そういう読み方、そしてそのような朗読の仕方が定着してきた。私の目にはそのように映るのである。

4 しかし、それは間違った解釈、誤った読み方ではないだろうか。なぜならこの詩の真の主人公は最愛の妹とし子の魂の声のほうではないかと思うからだ。「けふのうちにとほくへいつてしまふわたくしのいもうと」は本当は妹の魂であり、そのとし子の魂の声を、それこそ全身を耳にして聞きとろうとしている賢治がそこにいるからだ。賢治はとし子の亡骸（なきがら）のそばにいて、もはやそこにはいない。賢治の魂も、遠くへ逝ってしまうとし子の魂を追って飛翔している。

5 賢治のか細い、すがりつくような標準語が、(ウ)あたかも宙を流れていっているようではないか。その断片のような標準語の浮き沈みのなかから、大気を引き裂くようなとし子の声が聞こえてくる。そして、(注1)さきにもふれたように、遺言のようにいいのこした最後の言葉が、この詩の終わり近くになって姿をあらわす。「うまれでくるたてこんどはこたにわりやのごとばかりでくるしまなあよにうまれてくる」（こんど生まれてくるときは、自分のことばかりで苦しまないような人として生まれてきます）。

6 だから、この詩の主旋律は、とし子が呼びかける方言のなかにこそ流れていると思わないわけにはいかない。そのとし子の魂の呼びかけに全身をとらえられているのが、なんとか標準語をつむぎ出そうとしている賢治のほうだ。つぶやくような低い声で言

メモ欄

葉にしている賢治が、そこにうずくまっている。打ちのめされたように弱々しい言葉だ。

7 「永訣の朝」はだから、とし子の岩手方言をこそ息を吸って強くひびかせるように読まなければならないのである。そのときこの詩は、天地をつらぬく挽歌の悲傷を浮かび上がらせるのではないだろうか。賢治の(注2)魂呼(たまよ)ばいに応答するとし子の、あたかもカミの声のような叫びが地上に降ってくるのである。

8 そのようなC<u>くっきり明暗を分けた光景</u>が、さきの(注3)長岡輝子(てるこ)さんのすばらしい朗読でもかならずしもはっきりしていない。とし子の声が天界の奥から垂直に降下してくるようにはとらえられてはいない。賢治とし子がただ向かい合っているような気配だけが伝わってくるのである。

（注）1　さきにもふれたように――引用の前の部分で、とし子が臨終に「また生まれてくるときは、こんなに自分のことばかりで苦しまないように生まれてくる」と言ったことに触れている。

2　魂呼ばい――死者の霊魂を呼び戻す儀式。

3　長岡輝子――岩手出身の女優。宮沢賢治作品の朗読で知られた。

メモ欄

問１　傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は［1］～［3］。

(ア)「くぐもった」［1］
① はっきりしない
② 不自然である
③ なまりの強い
④ ゆっくりした
⑤ 元気のない

(イ)「せり出し」［2］
① でしゃばって
② はみ出して
③ 他を圧倒して
④ 想像を超えて
⑤ 押し出されて

(ウ)「あたかも」［3］
① そのとき
② ぴったり
③ まるで
④ しばらく
⑤ まことに

問２　傍線部Ａ「あめゆじゅとてちてけんじゃ」とあるが、とし子がここで「あめゆじゅ（雨雪）」をほしがったのはなぜだと考えられるか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は［４］・［５］。

①　窓を開けさせて、外の空気を吸いたかったから。
②　高熱で苦しんでいて、冷たいものを口にしたかったから。
③　わざと意味のないものを頼んで、兄を笑顔にさせたかったから。
④　妹のために何かしてやりたいという、兄の気持ちを察したから。
⑤　兄を自然と触れ合わせることで、悲しみを和らげてやりたかったから。

問３ 傍線部Ｂ「賢治はどうして、自分の呼びかけも方言にしなかったのだろうか」とあるが、賢治の呼びかけを方言にしないことでどのような効果が生まれているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 詩人である賢治と、岩手の人であるとし子の教養の差が引き立つ効果。
② 土地の霊がこびりついた言葉の力を、賢治が使いこなせないことを示す効果。
③ 標準語が前景、岩手方言が後景であることを印象づける効果。
④ とし子の声の力強さと、賢治の声の弱々しさが対比される効果。
⑤ 岩手弁を強く読むことで、挽歌の悲傷を浮かび上がらせる効果。

問４　傍線部Ｃ「くっきり明暗を分けた光景」とあるが、何と何が「明」と「暗」なのか。その組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **7** 。

① 「明」＝明るい詩語としての標準語　「暗」＝暗い背景としての岩手方言
② 「明」＝飛翔するとし子と賢治の魂　「暗」＝地上に残されたとし子の亡骸
③ 「明」＝つぶやくような低い賢治の声　「暗」＝大気を引き裂くようなとし子の声
④ 「明」＝カミの声のようなとし子の叫び　「暗」＝とし子に対する賢治の魂呼ばい
⑤ 「明」＝天界の奥から降下するとし子の声　「暗」＝賢治ととし子が向かい合っている気配

問５ 詩「永訣の朝」とエッセイ「宮沢賢治の挽歌」の表現について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) 「永訣の朝」の表現の説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **8** 。

① 口語自由詩である。
② 対句法が用いられている。
③ 直喩法が用いられている。
④ 反復法が用いられている。
⑤ 押韻法（おういんほう）は用いられていない。

(ii)　「宮沢賢治の挽歌」に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

① 第2段落は「賢治はどうして、自分の呼びかけも方言にしなかったのだろうか」と問題提起することで、その答えが本文中にあることを示唆している。

② 第3段落は「『永訣の朝』は賢治の挽歌とされてきた。むろん、それに誤りはない」と断言することで、賢治による標準語の部分が詩の骨格であることを強調している。

③ 第4段落は「しかし、それは間違った解釈、誤った読み方ではないだろうか」と逆接で始めることで、従来の解釈に疑問を投げかけ持論を展開している。

④ 第6段落は「だから、この詩の主旋律は、とし子が呼びかける方言のなかにこそ流れていると思わないわけにはいかない」と結論を示すことで、因果関係を確認している。

⑤ 第8段落は「とし子の声が天界の奥から垂直に降下してくるようにはとらえられてはいない」と否定することで、長岡輝子さんの朗読の欠点を批判している。

第6講　演習問題　解答

■演習問題

問題番号	設　問	解答番号	正　解
第３問	1	1	1
		2	5
		3	3
	2	4-5	2-4
	3	6	4
	4	7	4
	5	8	2
		9	3

（注）
－（ハイフン）でつながれた正解は，順序を問わない。

巻末付録

読解法一覧

読解法1　文の構造

文を読むときは「主部と述部」「修飾部と被修飾部」「接続部と文」という文の構造に気をつけよう。

《分析記号》
〈主部〉（＝とんがりカッコ）
【修飾部】（＝四角カッコ）
接続部　／（＝スラッシュ）　文

読解法2　指示語・接続表現

文を読むときは「指示語」と「接続表現」に気をつけよう。「指示語」があれば「指示内容」を捉え、「接続表現」があれば「前後のつながり」に注意する。また、本書では「論理的なつながり」を強調するため、「接続詞」「接続語」ではなく「接続表現」という表記で統一する。

《分析記号》
「指示語」　＝　○で囲む
「接続表現」　＝　○で囲む

「指示語」のカテゴリー

①「指示語」

前の名詞や説明を指す。

「これ」「それ」「あれ」指示語（指示代名詞）
「この」「その」「あの」指示語（指示連体詞）

②「一般化の指示語（まとめの指示語）」

前の具体例や詳しい説明をまとめる働きがある。指示内容は前に書かれている説明を幅広く捉える必要がある。

「このような」「そのような」「こういう」「そういう」

「接続表現」のカテゴリー

①「解説」

前の語や文や段落を詳しく説明したり、要約的にまとめたりする。

「つまり」「つまるところ」「すなわち」
「要するに」「畢竟」「結局」
↓要約的な言い換え

「言い換えれば」「換言すると」
↓言い換え

「言わば」
↓改まった表現（比喩表現・個人言語）への言い換え

②「例示」

前の内容の具体例を引いたり、一部を強調したりする。

「例えば」「言ってみれば」
↓読者の理解のための具体例をひく
「とりわけ」「なかんずく」
↓全体の中から一部を取り出して強調する

③「理由」

前の文に対する理由を説明する。

「なぜなら」「というのは（も）」
↓評論文に多い
「けだし」「だって」
↓小説文・随筆文に多い

④「帰結」

前の文からの結果・結論を示す。（順接が多い）

「だから」「したがって」「それゆえ」
「ゆえに」「よって」「それで」
「そこで」「すると」「そして」
（因果関係がない場合もある）

⑤「転換」

前の主張や主題を転換する。

「しかし」「だが」「ところが」「とはいえ」「さりとて」
「それでも」「それなのに」「それにしても」「けれども」
「けれど」
↓「主張」の方向転換（逆接）

「さて」「ところで」「閑話休題」
↓「主題・話題」の転換

⑥**「付加」**

前の内容に別の内容を付け加える。

「さらに」「しかも」「そのうえ」「加えて」
「また」「および」「かつ」
「だけでなく」「のみならず」
↓単純な付け加え

「一方、他方」「もう一方で」「他方で」
↓対照的な内容を付け加える

⑦**「補足」**

反対の内容を補足する。

「ただし」「もっとも」

⑧「選択」

前の内容と後の内容のいずれか一方を選択する（両方の場合もある）。

「または」「あるいは」「もしくは」「ないし（は）」「それとも」

読解法3　文の関係

文を読むときは「同値（イコール）」「対立」「因果」「包摂（抽象具体）」という関係に注意する。「文の構造」「指示語」「接続表現」といった形式、および「言葉の意味」といった内容の両面から「文の関係」を捉える。

《分析記号》

①「同値関係」 A ＝ B
②「対立関係」 A ↕ B
③「因果関係」 A ↓ B
④「包摂関係」 A ― a’

読解法４　レトリック（説得話法・修辞法）

筆者は自分の主張を理解してもらうだけでなく、納得してもらえるように様々な方法を用いて工夫をしている。その工夫が「レトリック（説得話法）」である。文を読むときには「レトリック」に気をつけよう。

①「問題提起」

読者に疑問を投げかけて意識を誘導し、答えとして自説を述べる。「疑問文」があったら、そのあとに「答え」が来ることを予想しながら読もう。

《分析記号》　波線をひく

「疑問文」→「◎答え（自説・持論）」

②「具体例」「体験談」

読者がイメージしやすいような例をあげる。また、実感を込めるために体験談をあげる。これらは筆者の主張を伝えるための手段なので、（丸カッコ）で括りながら常に「筆者の主張」を意識して読もう。

《分析記号》（丸カッコ）で括る

「◎主張」→（△具体例、体験談）→「◎まとめ」

抽象　→　具体　→　抽象

③「引用」

筆者が別の文章の筆者と対話しながら文章を展開することがある。二人で議論を進めることにより、論を深めるためである。引用は筆者の主張に対して「同意見」「反対意見」「根拠」「具体例」となるものがある。引用も（丸カッコ）で括りながら読んでいこう。

《分析記号》（丸カッコ）[引用] で括る
（△引用）[引用] →「◎筆者の説明・解釈」

④「比喩」

内容のイメージを喚起しやすくするために別のものに喩える。

《分析記号》□ で囲む
「直喩」＝「ような」「みたいな」をつけて喩える
「隠喩」＝「ような」「みたいな」をつけないで喩える
「擬人法」＝人でないものを人に喩える
「類比」＝同じグループ内の別のものに喩える

⑤「譲歩」

一般論や反論に一旦は理解を示しながらも、方向転換をして自説・持論を展開する。

《分析記号》　○　で囲む

「確かに」「もちろん」「なるほど」「むろん」→△一般論・反論

「しかし」「だが」「けれど」→◎自説・持論

読解法5　論理フレームワーク

筆者は自分の伝えたい内容を定義・整理・分類することで、内容を正確に相手に伝えようとする。あらゆる筆者に共通する整理の仕方が「フレームワーク」である。内容を正確に掴むためにも「論理フレームワーク」に注意しよう。

《分析記号》　○　で囲む

①「否定」のフレームワーク

Aではなく、（ではない。）Bである
Aより（ではなく）むしろB
Aのようで実はB

※AとBが反対の内容になる場合が多い。
※Bに筆者の主張が来ることが多い。

②「条件法」のフレームワーク

AならばB（AはBである）
Aの条件（前提、本質、基本）はBである
Aは常に（必ず、絶対）B
すべてのAはBである（全称文）
AのためにはBでなければならない
（AのためにはBである必要がある）
BでないならばAでない
B以外にはAはない
Bのときのみ（だけ、に限り）A

Bしてはじめて（してこそ）A

※主張（命題）を表す。
※Aは十分条件、Bは必要条件を表す。
※「AならばB」の否定は「Aは必ずしもBとは限らない」である。
「AであってBでない」ような「反例」が挙げられる。

③「連言」のフレームワーク

AかつB
Aさらに、そのうえ、加えて、B
Aだけでなく、（だけではない。）Bも
Aのみならず、Bも
Aと（や）B
Aつつ、ながら、同時に、ともに、B

※Aという主張とBという主張が同時になされている。
※「AかつB」の否定は「Aでない、またはBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

④「選言」のフレームワーク

AまたはB
AあるいはB
Aもしくは、B
Aないし（は）B
Aか（や）B

※AというBという主張のうちどちらか一方（または両方）がなされている。
※「AまたはB」の否定は「Aでない、かつBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

⑤「差異（対比）」のフレームワーク

AはXであるのに対し、BはYである
AはXであるのとは異なり（違って、別に、逆に）、
BはYである

※AとBの相違点を説明する。
※XとYは反対の内容になる場合が多い。

⑥「変化」のフレームワーク

Ａから Ｂへと変化する
Ａだったものが Ａでなくなる

※ＡとＢは反対の内容になる場合が多い。

⑦「類似（類比）」のフレームワーク

ＡはＸである。Ｂも（また）Ｘである
ＡとＢはともにＸである
Ａと同様にＢも（また）Ｘである
ＡとＢはＸという点で同じである

※ＡとＢの共通点を説明する。

⑧「逆説」のフレームワーク

Aすると、かえってB
Aと同時にB

※AとBは反対の内容になる。
※一見矛盾しているように見えるが真である。

⑨「因果」のフレームワーク

AだからB
AなのでB
AによってB
AのためB

※AとBに因果関係がある。

読解法6 論証

筆者は自説を主張するが、その主張は読者にとって飛躍があったり、常識に反する内容であったりする。そこで、筆者は読者に納得してもらうために「論証（証明）」を行う。その「論証」を読むために「論証のフレームワーク」に注意しよう。

①単純な論証

A（○根拠）→B（◎結論）

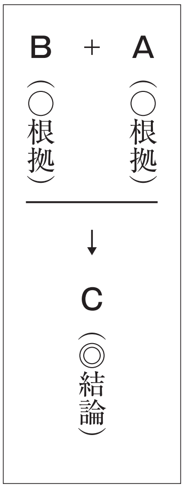
※根拠Aから結論Bが導かれている。

②論証の連鎖

A（△根拠）→B（○根拠）→C（◎結論）

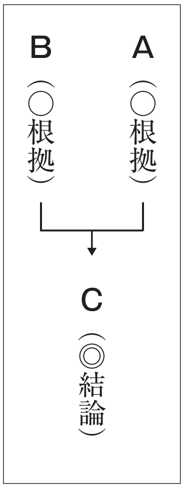
※主張Aが根拠となって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠となって主張Cが導かれる。

③結合論証



※主張ＡとＢが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Ｃが結論付けられる。
※ＡかＢかどちらか一方がもしないならば、この論証は成立しなくなる。

④合流論証



※根拠Ａだけでなく根拠Ｂもあり、結論Ｃが導かれる。
※ＡとＢはそれぞれ単独でも根拠になる。

読解法7 心情

小説文や随筆文では登場人物や作者の「心情」が問われる。「心情」を捉える際にはその心情が発生する「原因」まで捉える必要がある。そこで、「心情」を捉えるための「因果関係」を「心情」のフレームワークとして覚えよう。

①単純な心情

原因 → **心情** → **結果**

（事態、事情）　（行動、反応、発言）

※「心情」部分が書いてない場合は「原因」と「結果」から推測する。

②心情の変化

心情A	**→** 変化	**心情B**
	↑ 変化の原因	

※心情Aから心情Bへの変化を捉える。
※心情は反対のものになる。
※「心情A」「心情B」「変化の原因」の三点を捉える。

③結合原因の心情

原因A（外的）
＋
原因B（内的）
→ **心情** → **結果**

※「原因A」と「原因B」が組み合わさって「心情」が発生する。
※「原因B」は特殊事情であることが多く、「セリフ」「心中文」「過去のシーン」によって明らかになることが多い。

④心情の交錯

原因A → 心情A
＋
原因B → 心情B
→ 結果

※「心情A」と「心情B」が同時に存在する。
※「心情A」と「心情B」のそれぞれに「原因」がある。
※「心情A」と「心情B」は相反する心情である場合が多い。

傍線部内容説明問題解法　「どういうことか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
- 文法的構造
- 論理的構造

←

②「ポイント」を把握する。
- 指示語
- 比喩表現
- 個人言語

←

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

①「文構造」の分析について

★ 文法的構造

・主語（主部）―述語（述部）
・修飾語（修飾部）―被修飾語（被修飾部）や目的語（目的格）や補語（補格）など
・接続助詞や連用中止法
・倒置や省略

★ 論理的構造

・否定　・差異（変化）
・連言　・類似（アナロジー）
・選言　・逆説
・条件法　・因果

設問を解く際には、まずは傍線部（または傍線部を含む一文）の統語論的「構造」を分析することからスタートする。この構造を正確に分析して、なるべく元の構造を生かして、解答を構成するためである。ただし、日本語の慣習的統語規則を鑑みて、受動態から能動態に変換するなど元の構文を変形する場合もある。

②「ポイント」になる語句について

★ 指示語（代名詞）

指 これ、この、このような、このように、それ、その、そのような、そのように など

代 前者、後者、両者、右の、彼 など

★ 比喩表現 ＝ 直喩、暗喩、メタファー、レトリック など

★ 個人言語 ＝ 筆者が一般的な意味とは異なる特殊な意味で使っている言葉、学術（専門）用語

③「解答の根拠」となる部分との対応について

★ 同値関係

★ 対立関係

★ 因果関係

★ 包摂関係（抽象と具体の関係）

以上の関係がある部分と対応させる。
このような関係で対応した部分が、記述解答を書く際の「解答の根拠」となる。

傍線部理由説明問題解法　「なぜか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・A → ×
（飛躍している部分）

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

Ⅰ「A→x」の発見

論証が必要な命題（文）には「A→x」という飛躍した部分がある。まずは、どこに飛躍があるかを見つけよう。

> **①　主語（主部）→述語（述部）に飛躍がある場合。**
> **②　修飾部（接続部）→被修飾部（被接続部）に飛躍がある場合。**

※文構造（係り受け）を分析する中で、構造的につながっているが、意味的につながっていない部分を探す。
※「x」は、「なぜ『〜』か」というように設問が指定している場合もある。

Ⅱ　論証部の発見

飛躍を埋める部分が論証部となる。「A→x」のAの説明を求めよう。

Ⅲ 「論証」のフレームワーク

① 「単純な論証」 A → B

根拠Aから結論Bが導かれている。

〈例文〉 A子ちゃんは美人だ。 **根拠 A**

したがって、 ← **導出**

私はA子ちゃんが好きである。 **結論 B**

※実はこの導出に必要な前提として、「私は美人が好きだ。」というものがある。
これは「隠れた前提」として筆者の論証が成り立つように補ってやる必要がある。
筆者の論証が成り立つように隠れた前提を補うというルールを「**寛大の原則**」という。

②「論証の連鎖」　A → B → C

主張Aが根拠となって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠となって主張Cが導かれる。

〈例文〉

A子ちゃんは目鼻立ちがはっきりしている。　**根拠A**

[したがって、] ← **導出**

A子ちゃんは美人だ。　**根拠B**

[したがって、] ← **導出**

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※この形が「論証」の中では一番多い。「論証」の最後に来る文が「主張提示文」になる。
その前の文は「根拠」となる。

③「結合論証」

B ＋ A
↓
C

主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。

〈例文〉

A子ちゃんは美人だ。　**主張A**

＋ **結合**

私は美人が好きだ。　**主張B**

＝ **根拠**

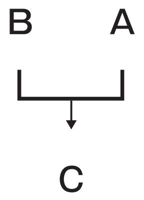
したがって、

← **導出**

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※先に説明した「隠れた前提」がある場合、この結合論証となる。
この形も「理由説明問題」ではよく出題される。

④「合流論証」



根拠Aだけでなく根拠Bもあり、主張Cが導かれる。

〈例文〉　A子ちゃんは美人だ。　**根拠A**

また、

A子ちゃんは性格もよい。　**根拠B**

したがって、　（**導出**）

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※この場合はどちらか片方だけでも「根拠」になる。
設問の場合には「理由を二つ説明せよ」となることが多い。

Ⅳ 論証を捉えるヒント

A 帰結の接続表現

「だから」「したがって」「よって」
「それゆえ」「ゆえに」
「それで」（「そこで」）

B 理由の接続表現

「なぜなら」「というのは（も）」
「けだし」「だって」

C 助詞など

「〜から」「〜ので」「〜ため」「〜より」「〜のだ」「〜のである」 ↓ **〜が原因・理由を表す**

D　直接表現、比喩表現など

「理由」「原因」「結果」「帰結」「結論」
「～から生じる」「～に根ざしている」
「根源」「背景」など

傍線部心情把握問題解法「心情」の解答プロセス

①

「文構造」を分析する。

・文法的構造

・論理的構造

↓

②

「ポイント」を把握する。

・原因 → 客観的事態や主観的事情

・心情 → ⊕心情や⊖心情

・結果 → 行動や反応や発言

↓

③

「解答の根拠」となる文と対応させる。

Ⅰ　単純な心情

原因　→　心情　→　結果

※心情把握問題の基本形。
※この場合は心情が書いてないため、原因と結果から挟み撃ちして心情を把握する問題になっていることが多い。

Ⅱ　心情の変化

原因Ａ　→　心情Ａ　→　結果Ａ　→　原因Ｂ　→　心情Ｂ　→　結果Ｂ

※心情把握問題で一番有名な問題。
※心情Ａから心情Ｂへの変化、そして変化の原因を三点セットで捉える必要がある。

Ⅲ　結合原因の心情

原因A ＋ 原因B

↓

心情

↓

結果

※原因Aだけ捉えて答えようとすると間違いになる選択肢が多い。

※原因Bは**「リード文」「会話文」「心中文」「回想シーン」**などにある場合が多い。

Ⅳ　心情の交錯

原因A → 心情A	+
原因B → 心情B	
↓ 結果	

※一番分析が難しい問題。

※心情Aの原因が原因Bになっていたりと、原因の部分を入れ替えての誤答選択肢が多い。